# 盛りすぎ企画 見抜かれた

## 「人知れず山奥に自生」の説明、一転

5、4、3、2、1。カウントダウンが進むと、暗く沈んでいたツリーが緑色の明かりで浮かんだ。アスナロが立つ、神戸市のメリケンパークは見物客でごった返していた。

引っ掛かるのは、高さが世界一と勘違いしている人が多そうなこと。「世界一と聞いて見に来ました。大きいですね」。神戸市内の女性(三)もそう笑顔を見せていたが、実際は違う。

勘違いを生んだ原因の一つは、主催者側のホームページのコピーにある。「めざせ世界一のクリスマスツリーPROJECT」という大見出し。それに「ロックフェラーセンターの巨大クリスマスツリーよりも大きな、世界一の高さ」という説明がある。

が、これには「人が届けた生木のクリスマスツリーとして根鉢を含めた鉢底から葉頂点までの植物体の全長が史上最大」と長い注釈が付く。ただの生木ならより大きなツリーがある。主催者側は百も承知なのだろう。さらに探すと、「オーナメント(メッセージを書き込む反射材)」の飾り付け数で世界一を狙っているほど騒ぎが広がったのか。

「話を盛りすぎた。核があって盛るならプロデュースで感動を呼ぶ。しかし、核がないのにやってしまった。広告でもここまでは許されるという線があるのに彼らにはなかった」と、阪神大震災でボランティア活動をした元長野県知事で作家の田中康夫さんは語る。

「『モミじゃなくてアスナロ?』『今どき世界一?』という部分で、何かにおった。『生木で持って来るのは素晴らしい。木を殺さないなんて』と感心したら、植えるのは海のそば。その後は生かすのでなく有効活用すると。それで多くの人がおかしいと思った」

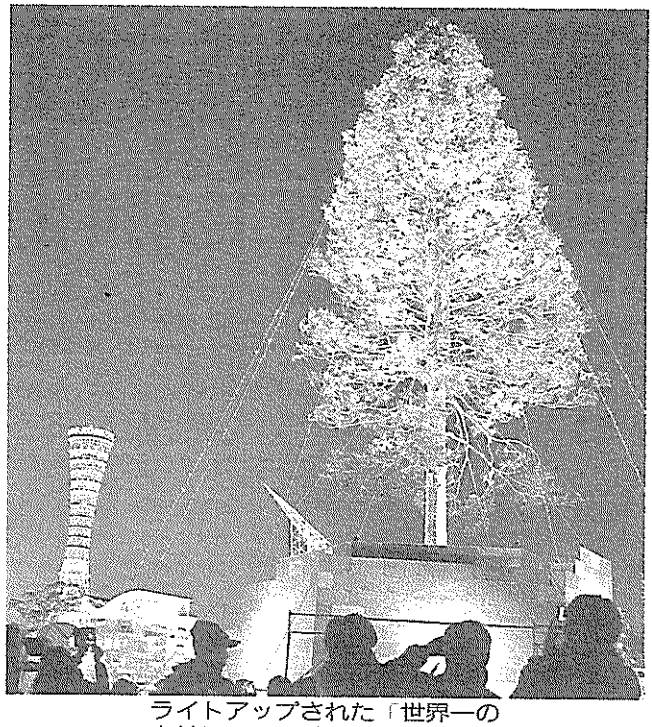
そして、変なにおいをかぎつけた人たちがネット上で集まり、主催者側の飾り付けをひとつひとつはいでいった。田中さんは「以前は弱者だった消費者側が、供給側のおかしさを見抜いた。そんなパラダイム転換があった」と分析した。

神戸女学院大学名誉教授の内田樹さんは「ルミナリエに対する神戸市民のうんざり感がツリーに向かった面がある」と指摘する。

神戸ルミナリエは震災のあった一九九五年の十二月から始まった。内田さんも足を運び「当初は鎮魂のために灯明を上げるような、いい感じだった」と振り返る。だが次第に集客イベントの面が強まってきた。

「やめた方がいいと思っている市民は多い。ただ、鎮魂で始まったルミナリエへの批判は口にしにくい。そこにとってつけたように鎮魂をうたうツリーが登場し、不満がものすごい勢いで流れた」とみる。

内田さん自身はツリーに「興味ない。やりたい人はやればいい」という立場。ただ「手抜きの企画会議で通したプロジェクトという印象。底が浅く、情けなく感じている」と嘆いた。



ライトアップされた「世界一のクリスマスツリー」=神戸市で

## 木を利用、記念品白紙

## 「手抜きで底浅く、情けない」

ほかにも主催者や支援者はネット上で「人知れず氷見の山奥にひっそりと自生していた」「それを西畠さんが見つけた」「山火事で唯一、生き残った神聖な木」ととらえられてしまうような触れ込みをしていた。それが「木がかわいそう」という批判を招いた。

西畠さんは十一月三十日付で改めてメッセージを掲載。「氷見市役所と地元の森林組合が見つけた木を採用した。年間何千本という富山県の森林組合が出荷している一本」と説明。「神聖で貴重な木」という印象を覆した。

「木を切り刻むのか」という批判の発端となった、木を加工した記念品の販売は白紙になった。二十六日までの展示期間が終わった後の利用方法は「一部は生田神社(神戸市)の鎮守の森の鳥居に。それ以外は未定」になった。

なぜ、火消しを迫られると分かる。

### デスクメモ

先日、安倍首相が「地方活性化の鍵はインスタ映え」と言っていた。リアルより見栄え重視ということか。それは株価と国民生活にも重なる。神戸のツリーにも。実際、この忘年会シーズンのなんとつつましいこと。これが国民の現実だ。見栄えよりもリアル。妖術から目を覚まそう。(牧)

2017・12・24